馬祖大師の禪

伊藤古鑑

一、馬祖大師の地位

六祖惠能大師の門下には龍象甚だ多くして、禪宗の法幢を大に樹立せしめたことはもないふものゝ中に於て、特に南嶽の懷讓、青原の行思、荷澤の神會、永嘉の玄覺、南陽の慧忠、司空の本淨の如きは各々其の一家をなした人であつたが、後世に影響を殘し、今も尙ほ其の兒孫の隆盛なることは南嶽と青原との二家であると云はねばならぬ。而して此の二家をして後世に影響の大ならしめたものは一に其の高弟に馬祖と石頭とを出したことに依るので、馬祖は南嶽に嗣いで臨濟禪の基礎を据へ、石頭は青原に嗣いで曹洞禪の宗乘をたと云ふことに依るのである。今この二家が其の當時の禪海を二分し、江西の馬祖か湖南の石頭かに天下の雲衲は集まるものとされて居たので、こゝに江湖の雲衲は直ちにり、一猶ㇾ思之遷ㇾ也、同ㇾ源而異ㇾ派、故禪讓之盛始ㇾ于二師一、劉軻云、江西主ㇾ大寂、湖南主ㇾ石頭一、般的の通稱となつたものであらうと信ずる。『景德傳燈錄』第六の馬祖章にも、

往來憧憧不ㇾ見ニ二大士一爲ニ無知一矣。

と云ふて居るが、また『宋高僧傳』第九の石頭章にも同じ意味の記事がある。師のことであつて、その當時の禪海は此の二甘露門に依つて支配されて居たかも知れぬが、石頭は馬祖よりも九歳の年長者であつて、而かも寂年は二年後であつたから、のと見なければならぬが、しかし其の聲譽は遠く馬祖に及ばなかつたものではあらうか。素より石頭と馬祖との宗風の相違から來たものか、兎に角、石頭の門下二十一人に對して、馬祖下の入室は實に一百三十九人の多きに達して居る。故に六祖も嘗て南嶽に向ひ、西天般若多羅の識言を援用して、

向後、佛法從ニ汝邊一起、已後出ニ一馬駒一、踏ニ殺天下人一。（『五燈會元』第三）

と預言して居て馬祖大師に至つて眞に天下の人を踏殺したと謂つべきである。卽ち大寂とは馬祖大師は六祖已後に於ける禪海の第一人者であつて、禪宗と云ふ宗旨を高く天下に宣揚し、眞個の衲子を打出すると云ふことからは、馬祖大師を以て一大恩人として尊崇しなければならぬと思ふ。素より達磨大師の功績も、めないと云ふのではない。たゞ今日の禪宗より逆に、深く其の出發點を考へて見た時には、或は更に偉大なる思想なり功績なりを此の禪海に殘されたのは此の馬祖大師ではなからうか。或る意味に

於ては、馬祖大師の禪が今日の禪宗、特に臨濟宗と云ふ宗旨を論ずることは出來ないものと信ずる。故に此處に不充分なる研究ではあるが、馬祖大師の功績を仰ぎ、その禪に關する二三の問題を學的に檢討して見たいと思つた譯である。

二、馬祖大師の略傳

馬祖大師の傳記及び其の語錄は『宋高僧傳』第十、『景德傳燈錄』第六、『佛祖歷代通載』第十四、『五燈會元』第三、『傳法正宗記』第七、『釋氏稽古略』第三、『禪宗正脉』第三を始め、『古尊宿語錄』『馬祖禪師語錄』等に記載せられて居る。卽ち馬祖大師の生地は漢州什邡と云ふ四川省成都府所轄の一地方で、姓を馬氏と云ひ、馬氏の祖師と云ふ意味から、後世になつて馬祖と稱するやうになつたものであらう。その容貌に就ては左の如く傳へて居る。

生而凝重、虎視牛行、舌過鼻準、足文大字、根塵雖同於幻形（『宋高僧傳』第十）

とあるから、凡庸ではなかつたと云ふことが知れる。生れられた年代は明かでないが、遷化の年が唐の德宗貞元四年、壽八十歲と云ふのであるから、逆算して唐の中宗景龍三年（西曆七〇九）に當ると云ふことが出來る。卽ち日本の元明天皇和銅二年に生れられたことになると思ふ。

いま『景德傳燈錄』等に依つて略傳を綴つて見るならば、幼にして資州の唐和尚に就て落髪し、渝州の圓律師に依つて受具し、唐の開元年中に衡山傳法院に於て南嶽大師に參じ、密に心印を受けたと云ふて居るから、師の三十三歳已前の開悟であつたと云はねばならぬ。唐の開元年中（西暦七一三―七四一）は馬祖の五歳より三十三歳までに相當するのであるから、開元年中の開悟と云へば、先づ三十歳前後と見て良からう。また『宋高僧傳』には、「亭年八十、僧臘五十」と書いてあるが、若し開悟から法臘を數へたとしたならば、馬祖の三十一歳の時に開悟したもので、開元二十七年に當るとも見える。

南嶽に參じた馬祖大師の修行は主として坐禪觀法であつたものゝやうである。故に坐禪に對する南嶽の見解は『景德傳燈錄』第五の南嶽章に左の如く說かれて居る。

開元中有二沙門道一（卽馬祖大師也）、住二傳法院一常日坐禪、師知二是法器一、往問曰、大德坐禪圖二什麼一、一曰、圖二作佛一、師乃取二一塼一、於二彼庵前石上一磨、一曰、磨レ塼作二什麼一、師曰、磨作レ鏡、一曰、磨レ塼豈得レ成レ鏡耶、師曰、磨レ塼既不レ成レ鏡、坐禪豈得レ成レ佛耶、一曰、如何卽是、師曰、如二牛駕一レ車車不レ行、打レ車卽是、打レ牛卽是、一無レ對、師又曰、汝爲レ學二坐佛一、若學二坐佛一、佛非二定相一、於二無住法一、不レ應二取捨一、汝若坐佛、卽是殺佛、若執二坐相一、非レ達二其理一、一聞二示誨一如レ飮二醍醐一

これは有名なる南嶽の示誨であつて、馬祖大師の思想の根幹となつたのも恐らく是の莫圖作佛の示誨で、卽心卽佛を提唱し、平常心是道を高調した馬祖大師は、この示誨に基因するものと云ふことが出來る。また馬祖大師は南嶽に問ふて、「如何用レ心、卽合二無相三昧一」と云ひ、南嶽は「汝學二心地法門一、如レ下二種子一、我說二法要一、譬二彼天澤一、汝緣合故、當レ見二其道一」と答へて師資の機緣を示されて居るやうに思ふ。而して『景德傳燈錄』には「一蒙二開悟一、心意超然、侍奉十秋日益玄奧」と書かれて居るから、馬祖の辛酸苦修、心地を磨き、法眼を得、無相三昧に徹して、終に南嶽の心印を得るまでには、長年月を要したものと云はなければならぬ。決して一朝一夕に馬祖の大機大用が得られたものではない。血滴々の修道を積んで始めて、古今獨歩の禪匠となられた譯で、南嶽大師も、獨り馬祖のみに對して「得二吾心一善二古今一」と云ひ、また「一切法皆從レ心生、心無二所生一、法無二能住一、若達二心地一、所作無礙云云」と云ひ、共に馬祖大師を賞揚して居らるゝことが充分に窺ひ知ることが出來るであらう。

馬祖大師は南嶽の下を辭して、建陽の佛迹嶺から臨川に移り、又江西の南康龔公山に化を布き四方の學者が雲の如く集まつたと云ふのである。唐の大曆年中（西曆七六六―六七九）には聖恩に浴し、鐘陵の開元精舍と名づけられ、時の連帥路嗣恭その德を慕ひ、親しく其の宗旨を受けたと云はれて居る。唐の貞元四年（西曆七八八）正月には、建昌の石門山に登り、その勝地を以て終焉のとこ

ろと定め、侍者に向つて曰く、「吾之朽質、當下於二來月一、歸中茲地上矣」と云ひ、回し、二月四日(『五燈會元』第三には二月一日沐浴跏趺入滅とあり)に入寂せられた武天皇延暦七年に相當して居る。亭年八十と云ふことは、『景德傳燈錄』第六には、禪師と云ふて居る。卽ち『景德傳燈錄』に載せて

二月四日、果有二微疾一、沐浴訖跏趺入滅、元和中、追諡大寂禪師、塔曰大莊嚴、

てある。また『佛祖歷代通載』第十四に、

得法弟子、凡百三十有九人、各爲二一方宗主一、轉化無窮、禪宗至レ此大盛于世。

と云はれて居るが、實にこの通りであらうと思ふ。

已上に於て馬祖大師の略傳を述べ終つたのであるが、これに依つて大體の想像ばづ馬祖は非凡の相好を具して、見るからに威嚴犯すべからざる風格を持つそして南嶽に參ずるまでは戒律を綿密に守つて居た人であつたらう。その目的は坐禪を修して作佛を求めて居たものに相違ないが、一たび南嶽の示誨に依つて卽心卽佛の妙諦を悟り、平常心卽道の眞境を體得してから、圓轉無礙、應用自在の禪機を我がものにしられたと信ずる。而して南嶽の會下になられたのは恐らく二十歲已後の壯年時代であつたらう。辛酸苦修十歲已後まで修行を續けられたことは前に述べた通りである。卽ち南嶽の遷化は唐の玄宗天寶三年秋日とあるから三

（西暦七四四）春秋六十八とあるから、馬祖の三十六歳の時に當つて居る。しかも馬祖が江西に化を布いて居るのを聞いて、南嶽が其の動靜を伺はせたと云ふことであるから、馬祖は既に三十六歳已前に於て一方の宗匠であつたことは否めない事實である。卽ち左の如し。

讓和尚聞二師闡一化江西一、問レ衆曰、道一爲レ衆說レ法、讓曰、摠未レ見下人持二箇消息一來上、遂遣二一僧一、往レ彼俟二伊上堂時一、但問二作麼生一、待二渠有一語、記取來、僧依レ教往問レ之、師曰、自從二胡亂一後三十年、不レ少二鹽醬一、僧回擧似讓一、讓然レ之。（『馬祖禪師語錄』）

馬祖大師は既に三十五六歳の壯時より法を說き、八十の老境に至るまで止めなかつたのであるから、その敎化は實に偉大なものがあつたと云はなければならぬ。特に仙境を愛し、深山幽谷に淸淨梵場を開き、俗塵を遠ざけて、獨り淸衆の來るを待つたことは、『宋高僧傳』等の記事に依つて充分に窺ひ知ることが出來ると思ふ。

三、馬祖大師の禪機

禪には禪數と、禪敎と、禪機との三方面があつて、これが鼎の三足の如く共に必要であると云はれて居る。而して若し、其の中の何れの一を缺くも、眞の禪の體得者とは云へないことも勿論である。禪數とは禪の觀法であつて、廣義に說明すれば小乘の五停心觀も、四念處觀も、大乘の八不中道觀、五重唯識觀を始め、天台、華嚴、眞言等の觀法も共に禪數であると云はねばならぬ。特に禪

數と稱して數息觀を主となし、數、隨、止、觀、還、淨などの六妙門を開き、更に十六特勝に細說して、觀智を運用し、涅槃に到る順序内容を開示したものである。

次に禪教とは禪の教理であつて、直指人心、見性成佛の最も勝れることを說き、文字の眞の意味を徹底的に顯示することが此の禪教の使命である。由來我が禪宗には此の禪教を排斥する弊風があるが、これは大に愼むべきことで、近時の如く邪教の横行するとき、眞の健全なる宗教として、我が禪宗を社會に宣揚するには、先づ口に、筆に、禪の勝れる教理を理路井然と或る程度までは說く必要があると思ふ。

次に禪機とは禪の大機大用であつて、禪の體得者たる宗師の活作用であるから、凡庸未透底のものゝ得て窺ひ知るところではない。我が禪宗の最も尊ばるゝ所以は、實に此の禪機の縱横にあるので、素より本分の宗師自得の力用ではあるが、しかし其の根柢には禪數に依つて眞路に進み、禪教に依つて眞路を誤らず、禪數禪教並び行じて眞味を解し、眞諦の境に達し、そこに任運に發する大機大用を發得するのであるから、禪機峻峭、更に思慮分別を挾む譯には行かぬ。殺活自在、權變無方の端的であると云ふべきであらう。

此の如く禪には三方面があるが、その中、禪數は小乘禪、大乘禪に於て既に說かれて居たけれども、それを禪宗獨特の坐禪觀法としたのは達磨大師であつたらうと思ふ。卽ち其の當時の世間から

壁觀婆羅門とか、坐禪宗の人とか云はれるやうになつたのは、この禪數の獨特な作法があつた爲めと云はねばならぬ。禪數と云ふものが禪觀となり、更に坐禪となつて、此處に深遠幽妙な禪數を說くやうになつたのである。また禪教も達磨大師に依つて說き出されたけれども、しかし今日傳はる『少室六門集』の如きは決して大師の禪教とは云へないのである。後來の人が達磨大師に假托して製作したものと云はなければならぬ。故に多少は禪の教理を示し、『楞伽經』を以て心地の法門となし二祖に傳へたものであらう。二祖より三祖に、四祖五祖を經て六祖に至り、漸く禪教の發達を見た譯のものであらう。素より『六祖壇經』も疑問の書ではあるけれども、全部を否定することは出來ぬ。卽ち六祖は禪數を以て禪宗獨特の坐禪觀となし、坐禪の道理を示して居る。

師示レ衆云、善知識、何名二坐禪一、此法門中、無障無礙、外於二一切善惡境界一、心念不レ起、名爲レ坐、內見二自性不動一、名爲レ禪——善知識、於二念念中一、自見二本性淸淨一、自修自行、自成二佛道一（『六祖壇經』坐禪第五）

かく云へば六祖は禪の教理を分明に、直截に我等に示されたものと云はねばならぬ。また禪機も達磨大師に依つて傳へられたことは勿論であるが、それが未だ表面の問題とならず、また六祖も餘り禪機の活手段を用ひられては居ないやうに思ふ。唯だ荷澤の神會に對して柱杖子を以て打たれたと云ふことが『六祖壇經』に出て居るのみである。然るに、これが六祖已後になると、大に其の禪

風を異にし、大衆を接得する上に、或は拂子を竪起し、或は棒を以て打ち、或は大喝一聲するなど、種々なる手段を講ぜらるゝやうになつたもので、素より宗師の大機大用が表面の上に顯はれたものであるから、凡庸の思議するところではないけれども、兎に角、禪宗の祖師として、この禪機を大衆の前に覿面提示せられ出したのは、先づ馬祖大師を以て第一人者と見なければならぬ。それ已前に於ても、青原の行思禪師が拂子を用ひたとか、南陽の惠忠國師が一圓相を畫いたとか云ふて、『景德傳燈錄』には載せて居るが、馬祖大師に至つては常に行じ、常に種々なる活手段を弄して居たやうである。今その重なるもののみを摘記しても、打一摑、打着、畫地、一圓相、棒、揚眉瞬目、拂子竪起、一喝、扭鼻頭等の活手段が『古尊宿語錄』を始め、二三の僧傳に傳へられて居る。尚ほ此の外にも幾多の禪機として、馬祖の皴皮肉を窺ふことが出來るので、或る時は諄々として宗乘を說き示し、或る時は叱呵して別時に來れと云ひ、また或る時は直ちに其の人を呼んで「是什麼」と云ふが如き、その場〳〵の活商量は目に見るやうに思はれ、馬祖ならでは能はず、實に大機大用の人であつたと云ふことが想像出來る。

由來この禪は口で說明することを許さぬのである。馬祖大師も或る時、「凡有言句是提婆宗、只以此箇爲主」と云ひ、雲門大師はこれを拈提して、「馬大師好言語」と云ひ、圓悟禪師は更に「體究得提婆宗麼、若道言句是、也沒交涉、且道、馬大師意、在什麼處」と

と提撕して居らるゝが、そこに宗旨の暗號を作つて居ても、その實は超說明の活作用である。他の密令はあるので、他の窺覦を絶對に許さぬのである。故に禪に於て說く說明は、說明としての體裁を得て模倣すべき筋のものではない。唯だ道て、說不說、言不言、眞に自己の胸襟より流出して、蓋天蓋地し去る底の活商量が出來る。故に東嶺禪師も『宗門無盡燈論』に於て、特に力用の一章を設けて、大機大用底の正脈を宣揚して、

若不レ傳二向上些子一、大好鬼窟裏活計、雖レ發二大用一、是以古來雖レ有二多少正知見人一、得二大機大用一底、就レ中又稀云云

と云ひ、馬祖下の善知識の中、馬祖の正眼明白の大宗師のみが始めて圓轉無礙、大機大用を發し已能知二向上旨趣一、履踐不二明白一、只是抱道底人、尙未レ能を得て大機あるものは百丈一人のみと云ひ、大用あるものは黃檗そのものと云はれ、唱導の人はあれど、大機大用底の人は稀であると云ふて居る。されば眞個に道眼明白の大宗師ならば兎も角、一個、唱導の人が之れを模倣したとすれば、或は他の誹謗を受けても止むを得ない。況んや鈍漢阿師の輩が之れを模倣し去るとせば、それこそ宗門の一大事であつて、眞に百害ありて一益だになしと知らねばならぬ。卽ち禪機は、唯だ其の人にのみ具するから自分も斯く行ふと云ふのでは、決して禪機とは云へない。禪機とは發動の意で、詳しいことは天台大師の『法華玄義』六上に、微の義、關の義、宜の義を說明し、慧均の『大乘四論玄義』第六には、機微の義、須微の義、機關の義を擧げて說明して居

るが、これ等教宗の意味では所化の衆生に就て云ひ、大機大用と稱して居る。即ち『谷響集』第九に、禪家教家の相違を說明し、また常に禪機と云ひ、『中峰廣錄』には、

禪機者、禪者之心也、謂機者、心之所應也と云ひ、禪者の本心が、機緣に應じて頓に發し、自由自在に外に動くことを禪機と云ふと論じて居る。更に『大明錄』には、

文義俱明者、謂二之理一、忘レ言獨契者、謂二之機一。

と云ふて居るが、要するに言語思慮の及ばざる不思議の本體を眞理と云ひ、その眞理に冥合して外部に發動する可能性を機と云ひ、正しく此の機が外部へ動いて緣に應じたところを機の用と云ふものであらう。しかし大機と大用とは禪の宗匠が有する禪機の體と用とに名づけた相違のみで、體のあるところ必らず用があり、用のあるところ必らず體がある譯で、その體たる大機は素より不可言不可說の妙諦で、我等凡庸の窺覦を許さない。唯だ越格なる大宗匠のみが把握する妙境で、我が禪宗では先づ此の不可說の妙諦を覺知することが出來ると說き、初祖達磨大師已來、大師に此の見性成佛の意義を高唱して、六祖惠能大師に至つて更に頓悟にせられ、見性を以て其の宗旨の根幹をなさしめて居るのである。然らば此の馬祖大師の宗乘は如

何にして說き、如何にして其の禪機をして縱橫ならしめたか、その根幹に觸れて見よう。

四、馬祖大師の宗乘

馬祖大師の宗乘に就て、先づ大師の示衆から一考して見るならば、自心是佛の思想が其の根幹をなして居るものゝやうに思ふ。

祖示レ衆、汝等諸人、各信二自心是佛一、此心卽佛、達磨大師、從二南天竺國一來、至二中華一、傳二上乘一心之法一、令二汝等開悟一、又引二楞伽經一、以印二衆生心地一、恐二汝顚倒不レ信二此一心之法一、各各有レ之故、楞伽經以二佛語心一爲レ宗、無門爲二法門一云云（『馬祖禪師語錄』）

これに依つて考へて見ると、馬祖の宗乘は、自身の本心本性を以て直ちに佛陀なりと云ひ、他に佛陀を求め、佛法を求めたならば、それは顚倒の甚だしきものであると見たものであらう。

夫求レ法者、應無レ所レ求、心外無二別佛一、佛外無二別心一。（『馬祖禪師語錄』）

と云ふて居るのは、慥かに馬祖の宗乘を如實に言ひ顯はしたものである。卽ち馬祖に從へば、自心が其儘佛陀で唯だ無一念とならば、生死の根本たる妄念は除かれるのである。本來造作を假らず、迷悟染淨の兩邊に立つて滯るのを嘆んだもので、善惡邪正、迷悟染淨から次ぎへと起る妄想で、諂曲、邪僞、我慢、貢高と、次ぎから次ぎへと起る程、自家の本心に轉た疎にして轉た遠くなるばかりである。故に末に走れば走る衆多の迷情である。取捨分別する微細の一念から起る

から、こゝに最初の一念に立ち還つて法性三昧の中に在つて、著衣喫飯し、言語應對しなければならぬと說いて居る。卽ち左の如し。

一切衆生、從ニ無量劫一來、不レ出ニ法性三昧一、長在ニ法性三昧中一、著衣喫飯、言談祇對、六根運用、一切施爲、盡是法性、不レ解ニ返源一、隨レ名逐レ相、迷情妄起、造ニ種種業一、若能一念返照、全體聖心。

（『馬祖禪師語錄』）

而して馬祖は此の一念返照、全體聖心のところを佛陀と云ひ、佛卽心、自心その儘佛陀の妙境界なりとして、そこに馬祖の宗乘たる卽心卽佛、平常心是道、立處卽眞等の活祖意を高く揭げて、禪機超脫、權變無方、良く一世を風靡し去つたものであるが、其の宗乘の根元は前にも云ひし如く南嶽大師の示誨に依つて莫圖作佛の眞髓に徹したからであらう。卽ち莫圖作佛とは佛にすら作らうと思ふな、人々本具箇々圓成、何をか欠少するや。卽心卽佛であつて、作佛を圖るすら妄想であると云ふので、この活祖意は具眼者ならでは容易に會得することの出來ない深旨がある。之を會得するには、我が禪門の學徒が日夜に實參實究する話頭として大要左の如きものがある。

一、馬祖日面佛月面佛

擧、馬大師不安、院主問、和尙、近日尊候如何、大師云、日面佛月面佛。

この則は『碧巖錄』第三則及び『從容錄』第三十六則に出て居る本則で、或は「馬大師不安」とも單に「馬師不安」「日面月面」とも云ふて居るが、その本據は『五燈會元』第三、『釋氏稽古略』第三等に出て居る。

二、馬大師野鴨子

擧、馬大師、與二百丈一行次、見二野鴨子飛過一、大師云、是什麼、丈云、野鴨子、大師云、何曾飛去也、大師、遂扭二百丈鼻頭一、丈作二忍痛聲一、大師云、何曾飛去。

この則は『碧巖錄』第五十三則に出て居る本則で、或は「百丈野鴨子」も云ふて居るが、その本據は『五燈會元』第三、『百丈禪師語錄』等に出て居る。

三、馬祖四句百句

擧、僧問二馬大師一、離二四句一絶二百非一、請師直二指某甲西來意一、馬師云、我今日勞倦、不レ能二爲レ汝說一、問二取智藏去、僧問二智藏一、藏云、何不レ問二和尚一、僧云、和尚教二來問一、藏云、我今日頭痛、不レ能二爲レ汝說一、問二取海兄一去、僧問二海兄一、海云、我到二這裏一却不會、僧擧二似馬大師一、馬師云、海頭黑。

この則は『碧巖錄』第七十三則及び『從容錄』第六則に出て居るので、或は「馬祖白黑」とも「藏頭海頭」とも云ふて居る。その本據は『景德傳燈錄』第六、『五燈會元』第三等に出て居る。

四、卽心卽佛

馬祖因大梅問、如何是佛、祖云、卽心是佛。

この則は『無門關』第三十則に出て居るので、或は「卽心是佛」とも云ふて居る。その本據は『景德傳燈錄』第七、『五燈會元』第三に出て居る。

五、非心非佛

馬祖因僧問、如何是佛、祖曰、非心非佛。

この則は『無門關』第三十三則に出て居る。その本據は『景德傳燈錄』第六、『五燈會元』第三にあるので「僧問、和尚爲什麼說卽心卽佛、師云、爲止小兒啼、僧云、啼止時如何、師云、非心非佛云云」とあるのを要約したものであらう。尙ほ此れは前の「卽心卽佛」の本則に對して類則と云はれ、此の外に馬祖の門下の南泉普願禪師の本則として、「不是心佛」「智不是道」「平常是道」等が『無門關』にあり、また『碧巖錄』第二十八則の「南泉不說底法」等が揭げられて居るが、これ等も馬祖の「卽心卽佛」に關聯して居るやうに思ふ。

已上、『碧巖錄』『從容錄』『無門關』等の本則を擧げて馬祖大師の宗乘を示したのであるが、これに對する分別義解は略して、今は唯だ馬祖大師の中心思想たる卽心卽佛のみを討究して見よう。

五、卽心卽佛の思想

馬祖大師の中心思想は何であるかと云へば先づ卽心卽佛の四字を以て答へることが出來る。卽ち前に『無門關』の本則として擧げたのであるが、その本據を『馬祖禪師語錄』の一章に依つて左の如く引用しよう。

大梅山法常禪師、初參ㇾ祖問、如何是佛、祖云、卽心是佛、常卽大悟、後居ニ大梅山一、祖聞ニ師住山一、乃令ニ一僧到一、問云、和尙見ニ馬師一、得ニ箇什麼一便住ニ此山一、常云、馬師向ㇾ我道、卽心是佛、我便向這裏住、僧云、馬師近日佛法又別、常云、作麼生別、僧云、近日又道ニ非心非佛一、常云、這老漢惑ニ亂人一、未ㇾ有ニ了日一、任運非心非佛、我只管卽心卽佛、其僧回擧ニ似祖一、祖云、梅子熟也。

また是れは「非心非佛」の則の本據として前に示したのであるが、更に委しく『景德傳燈錄』の一章を引用して置かう。

僧問ニ和尙一、爲ニ甚麼一說ニ卽心卽佛一、祖曰、爲ㇾ止ニ小兒啼一、曰、啼止時如何、祖曰、非心非佛、曰、除ニ此二種一人來如何指示、祖曰、向ㇾ伊道、不是物、曰、忽遇ニ其中人來一時如何、祖曰、且敎ニ伊體ニ會大道一。

また此の卽心卽佛に關する示衆は前にも少しく引用して置いたので、こゝに具文を引用しないが要するに馬祖大師の中心思想は此の卽心卽佛である。自心が卽佛であり、覺體であるから、この本覺の覺體を其儘覺了すれば良いのである。徒に自家の寶藏を顧みずして、他に佛を求め法を求める

ことは笑ふべきの骨頂であると示されたものであらう。而して此の卽心卽佛の思想は心佛無差別の思想であつて、『華嚴經』の三法無差別說から出發したものではなからうか。卽ち『華嚴經』に、

心如二工畫師一、造二種種五陰一、一切世間中、無二法而不一レ造、如レ心佛亦爾、如レ佛衆生然、心佛及衆生是三無二差別一。（『正藏』第九卷四六五丁）

と云ふて居るが、この經文に對する說明は、天台華嚴の兩一乘の間に大に其の說を異にし、華嚴宗は賢首大師の『探玄記』第六、淸涼大師の『華嚴大疏抄』第十九上に唯心說を以て說明して居る。いま簡單に『大疏抄』の本文のみを擧げるならば、

心是總相、悟レ之名レ佛、成二淨緣起一、迷レ之爲二衆生一、成二染緣起一、一心以レ眞爲レ體。

と云ふて心佛及衆生の中、一心を以て非迷非悟總相の理心となし、衆生と佛との二法を以て迷悟染淨の緣起の事相として說いて居るやうに思ふ。然るに天台宗は特に趙宋時代に入つて山家山外の對抗となり、その論爭の中心思想は此の三法無差であつて、山外の晤恩、源淸、孤山、梵天は皆この唯心說を取り、心法能造、生佛所造の說を取つて讓らず、四明大師は山家の天台正統の義にて三法俱に能造能具、所造所具と云ふて、諸法實相論の立場を闡明にしたのである。その他唯識宗に於ては此の三法無差の經文を唯識無境の義に取り、眞言宗に於ては三三平等の祕說に用ひて

居るが、我が禪宗に於ては此の卽心卽佛の思想となつて高調せらるゝに至つたやうに思はれる。

素より此の卽心卽佛の語は馬祖大師に始まつたものではない、既に梁時代に於て寶誌の『大乘讃』に、

不レ解二卽心卽佛一、眞似二騎レ驢覓レ驢。

と云ふ一句があり、また善慧大士の『心王銘』にも、

乃至、自觀二自心一、知二佛在レ內、不二向レ外尋一、卽心卽佛、卽佛卽心。

等と云はれて居るから、豈敢へて禪宗丈けの專門語ではない。古くは羅什、僧肇當時から此れに似た言句はあつたのである。また我が禪宗としては六祖大師も弟子の法海に向つて卽心卽佛の深旨を說かれた一段がある。

問曰、卽心卽佛、願垂二指諭一、師曰、前念不レ生卽心、後念不レ滅卽佛、成二一切相一卽心、離二一切相一卽佛、吾若具說窮劫不レ盡。

また馬祖と同時代の石頭大師も『景德傳燈錄』第十四に、

師一日上堂曰、吾之法門、先佛傳受、不レ論二禪定精進一、唯達二佛之知見一、卽心卽佛。

と云ふて居るから、卽心卽佛は馬祖大師のみの語ではないけれども、特に馬祖は此の語を多く拈提

し、學人を接得することが親切であつたからと思ふ名になつたものであらうと思ふ。

然らば此の卽心卽佛とは如何なる意味であらうか。先づ心とは眞心であるか、師の間に異つた思想のものではない、異音同調である。卽ち直指人心、見性成佛は卽心卽佛の思想であり、禪宗の根本義とも見らるべきで、直指人心、見性成佛と何等異つた思想のものではない、異音同調である。卽ち直指人心は卽心卽佛であり、見性成佛は卽心卽佛なるが故に云はれる。

かくの如く觀じ來れば、實に卽心卽佛の思想は、禪宗の根本義とも見らるべきで、直指人心、見性成佛と何等異つた思想のものではない、異音同調である。卽ち直指人心は卽心卽佛であり、見性成佛は卽心卽佛なるが故に云はれる。

は卽佛と云ふべきで、禪定解脫を論ぜず、精進修證を說かず、頓に吾人の自性その儘を覺了すれば佛陀であると云ふことを主張し、他に向つて馳求することを極端に嫌ふので、馬祖大師も大珠惠海に對して左の如く垂誡を加へて居る。

師初至二江西一參二馬祖一、祖問、從二何處一來、曰、越州大雲寺來、祖曰、來レ此擬レ須二何事一、曰、來求二佛法一、祖曰、自家寶藏不レ顧、拋二家散一走作二什麼一、我這裏一物也無、求二什麼佛法一、師遂禮拜問曰、阿那箇是慧海自家寶藏、祖曰、卽今問レ我者是汝寶藏、一切具足、更無二欠少一、使二用自在一、何假二向レ外求覓一、師於二言下一大悟、識二自本心不一レ由二知覺一、踊躍禮謝（『頓悟要門論』卷下）

これ實に簡明直截、禪宗の本分を良く言ひ顯はされた垂語で、この思想に依つて馬祖の門下は皆繼承し、中にも百丈の正系は黃檗に傳はり、黃檗は更に臨濟大師に傳へられたものであらう。故に黃檗禪師の『傳心法要』と云ひ、臨濟大師の『臨濟錄』と云ひ、みな同一思想を同一言句に依つて詮表せられて居ることに注意しなければならぬ。

祖師西來、直指二一切人全體是佛一、汝今不レ識、執レ凡執レ聖、向レ外馳騁、還自迷レ心、所以向レ汝道、卽心是佛。

『傳心法要』にも、

と云ひ、この心は本來清淨にして一點の相貌なきこと虛空の如くなれば、此の心は一切の相を離れた無心の心であると云ひ、無心を直下に體得しなければ、累劫の修行も何の利益だにに無しと云ひ、

こゝに黄檗禪師は一箇無心道人を高調せられて居る。

如今學道人、不レ悟二此心體一、便於二心上一生レ心、向レ外求レ佛、著レ相修行、皆是惡法、非二菩提道一、供二養十方諸佛一、不レ如供二養一箇無心道人一、何故、無心者無二一切心一也。

と云はれて居る。これに對して臨濟大師の思想も亦同調同和であつて、特に馬祖大師の思想は臨濟大師に至つて敷演せられた觀がある。卽ち『臨濟錄』の到るところに「約二山僧見處一、與二釋迦一不レ別」とか「與二祖師一不レ別」とか、或は「莫二向レ外求一」とか「今日多般用處、欠二少什麼一」とか、更に自家の寶藏を說いて一無位の眞人とか、聽法無依の道人とか、或は平生無事底を擧し、「隨處作レ主、立處皆眞」その本分を提示せられて居ることは、今更その引文を擧げるまでもなく、明瞭なることであらうと思ふ。

これを要するに馬祖の中心思想は卽心卽佛であつて、この卽心卽佛は馬祖の創見ではないけれど、特に馬祖に依つて有名となり、その思想は黄檗、臨濟に依つて傳へられ、今日の禪宗の根本義となり、隨濟禪の宗乘となつたものと云ふことが出來やう。

六、非心非佛とは何ぞや

次に非心非佛と云ふことも馬祖大師の語であつて、その本據は前の卽心卽佛のところに擧げた通りである。然らば非心非佛とは如何なる意味であらうか。馬祖の門下の伊闕伏牛山自在禪師は、卽

心卽佛を以て無病求藥の句と云ひ、非心非佛を以て藥病對治の句と見て居らるゝ師の『宗鏡錄』第二十五には、

問、如二上所一レ說卽心卽佛之旨、西天此土祖師同詮、理事分明如二同眼見一、云何又說二非心非佛一、答、卽護レ過遮レ非、去卽心卽佛是其表詮、直表二示其事一、令下親二證自心一了了見性上、若二非心非佛一其遮詮、奪二下情見一、依通意解、妄認レ之者、以二心佛俱不可得一故、云云

と云はれて居るが、要するに此等は學人の爲めに、强いて言句に寄せて說明したまでゞ、この言句に骨なく、圓轉無碍に、或る時は卽心卽佛と垂語したものであらう。卽ち馬祖の言句には舌頭更れを聞く學人に若し執見を以て是非したならば、遙かに馬祖の眞意には到底觸ることは出來ない。また永明延壽禪が馬祖の非心非佛を聞いて、「這老漢、惑二亂人一未レ有二了日一」、任運非心非佛、我只ふたと云ひ、また馬祖は法常の此の語を聞いて、「梅子熟也」と許し、禾山も「大讃嘆したと云ふことであるが、實に法常の見解は超絶したものと謂つべきである。

思ふに、馬祖大師は卽心卽佛を常に擧揚し、學人を大に接得しられたものであるが、この卽心卽佛は簡にして要、實に宗旨の全體を說き出して居るけれども、卒爾に之れを聞いて起りつゝある妄想心を以て直ちに佛陀なりと誤認し、自己の心性を覆藏して顧みないと云ふ弊害に

陷り、到底救ふことの出來ない固陋の道人となつて、宗旨から云へば外道邪見と云はねばならぬ。恐らくは馬祖の當時にも此の弊害はあつたものであらう。また馬祖の入寂後も卽心卽佛の語を擧揚したものゝやうである。卽ち『五燈會元』第三に、

湖南東寺如會禪師、自大寂去世、師常患門徒以卽心卽佛之譚、誦憶不已、且謂、佛子何住而不卽心、心如畫師、而云卽佛。遂示衆曰、心不是佛、智不是道、劍去久矣。

と云ふて居るが、この「心不是佛、智不是道」は南泉の普願が擧揚した宗旨で、『無門關』第三十四則に「智不是道」の則となつて說かれて居る。また南泉は常に「不是心、不是佛、不是物」の三句を力說したと傳へられ、これ亦、『無門關』第二十七則に本則となつて出て居るが、この三句の思想も馬祖の卽心卽佛に就て、その弊害を救はんとして說き出されたものゝやうに思ふ。卽ち左の如し。

江西老宿、不是心、不是佛、不是物、先祖雖說卽心卽佛、是一時間語、空拳黃葉止啼之說、如今多有人、喚心作佛、喚智爲道、見聞覺知皆是道、若如是會者、何如演若達多迷頭認影、設使認得、亦不是汝本來頭。（『續藏』一輯二編第二十三套第二册一四八丁）

これ等に依つて考へて見ると、唯だ單に卽心卽佛と云へば、そこに錯つて定盤星を認め、卽心卽佛の眞意に徹することが出來ないから、こゝに非心非佛となつて顯はれ、不是心不是佛不是物となるのである。

つて顯はれたものであらう。故に此の非心非佛は素より卽心卽佛と同意趣のものではあるが、人に依つては大に見解を異にし、白隱老漢の如きも同一視しなかつたやうである。答へて、卽心卽佛と云ひ、啼き止んで後には非心非佛と示し、この小兒の啼きを止めんが爲めには卽心卽佛も是物と云ひ、更に已上の三に依らざる底の人あらば、非心非佛の二邊を離れた人には不眞に大道體會の人と云はんと示されて居るが、これは餘りにも馬祖の婆心で、これは餘りにも馬祖の婆心で、るが、しかし思想の進んで行く徑路としては首肯すべき點もあらうと信ずる。非佛の則に對して、「若向二者裏一見得、參學事畢」とまで云ふて居るが、しかし馬祖禪師も「非心非佛話頭飜、四海禪流著レ眼難」と云はれ、白隱禪師また話頭に徹したと云ふのであるから、凡漢阿師の到底窺ひ知るところではない。

かく非心非佛の則は容易に見徹することを許さないが、しかし實際を云へば、心と云ひ佛と云ひ一切の名相言句を立てず、一切の思慮分別を加へない自性本地のところが非心非佛の當體で、心と云ふも得ず、佛と云ふも禍言であつて、如何なる名を以で喚んでも、本分の上からは盡く誤りである。心と說き佛と說き、性と說き道と說くも、みな好肉上に瘡を剜るのみで、己本地風光、本來面目、晝夜放光動地、常在二面前一出入一」と云はれて居るが、實に吾人の面前に出入歷劫無名の本體は常に吾人の面前に明明了了として天地に彌滿して居るのである。故に古人も「自

本地の風光であり、本來の面目となつて躍如として無碍自在であらねばならぬ。それには自己と云ふ妄想を捨て、修とか證とか、迷とか悟とか云ふ一切の分別を去り、凡なく聖なく、修道なく造作なく、眞に初祖の廓然無聖のところ、六祖の本來無一物に體達しなければならぬと思ふ。こゝに到り達すれば最早や立も得たり、不立も得たり、建立も亦得たり、掃蕩も亦得たり、盡く是れ自家の妙用で、一切の法も盡く佛法となり、一切の心も盡く大道となるので、この道理を馬祖は平常心是道と垂語して居る。

示レ衆云、道不レ用レ修、但莫二汚染一、何爲二汚染一、但有二生死心一、造作趨向、皆是汚染、若欲二直會一其道一、平常心是道、何謂二平常心一、無二造作一、無二是非一、無二取捨一、無二斷常一、無レ凡無レ聖、經云、非二凡夫行一、非二聖賢行一、是菩薩行、只如今行住坐臥、應機接物、盡是道、道卽是法界、乃至恒沙妙用、不レ出二法界一。（『馬祖禪師語錄』）

この平常心是道は是れ亦、南泉普願の宗旨として傳へられ、『無門關』第十九則に擧げられて居るけれども、その實は師の馬祖より傳承したもので同調同和の思想と見なければならぬ。平常心とは卽心卽佛に於ける卽心に當り、是道とは卽佛に當るもので、決して平常心と云ふても念起念滅の妄想心ではない、馬祖は「但有二生死心一、造作趨向、皆是汚染」と云ひ、南泉は「擬レ向卽乖」と說き、道の知にも屬せず、不知にも屬せず、「太虛廓然洞豁」と指して居るところを見ても、吾人凡夫の平

常心ではないことが明瞭である。故に此の平常心のところに馬祖は「行住坐臥、悉是不思議用」と云ひ、更に「一切具足、更無欠少、使用自在」と云ひ、「何假向外求覓」と云ひ、「道體會の平常底と云ふべきであらうと思ふ。

七、馬祖大師の功績

かくの如く馬祖大師の一言一語は宜く今日の禪宗の根本を道破したもので、その門下の多くして、馬祖の如く大珠慧海、汾業無業等みな其の當時の第一線に立つた禪匠のみで、宗乘を傳へたる百丈懷海、西堂智藏、南泉普願を始め、大梅法常、鹽官齊安、麻谷寶徹、盤山寶積には居られないのである。最後に其の功績として二三を數へて見るならば、第一に禪宗の宗眞實に馬祖の偉大さを讃提して、良く後生を培養したことである。即ち馬祖下百三十九人と云へば、石頭下と云へる藥山惟儼、丹霞天然を始め、隱峰、靈默、龐蘊等の禪匠も、みな馬祖の門に往來した人である。殊に藥山は馬祖の法嗣と云ふ一說さへあるので、藥山より出づる曹洞雲門、法眼も盡く馬祖下の法系にあるとしたならば、實に馬祖の禪宗に於ける地位は愈々大なるものがあると云はねばならぬ。

第二の功績はその語錄に依つて馬祖の禪機を知ることが出來るので、それ已前の語錄としては

『六祖壇經』の如き、『永嘉集』の如きがあると云ふても、今日の語錄の研究上から見れば、先づ其の體裁を爲すものは馬祖の語錄を以て劃期的のものと云はなければならぬ。而かも其の内容の一々が良く直截簡明に宗旨を言ひ顯はして居ることである。

次に第三の功績は、良く宗風を樹立し、門戸を始設しられたと云ふ點である。禪寺を建てたり叢林の規矩を設けられたのは、その嗣の百丈懷海禪師であると云ひ、確固たる文獻もあるけれども、しかし獨り百丈禪師の功績とのみ云ふことは出來ないであらう。恐らくは馬祖に依つて其の端を開いたもので、『馬祖大師語錄』を見ても、法堂と云ひ、方丈と云ひ、僧堂と云ひ、僧堂内に於ける聖僧、禪牀、前門等と云ふが如き語が的確に顯はれて居るから、多くの僧衆の有る限りは、修行すべき一定の道場伽藍が建てられて居たものと見なければならぬ。故に百丈に至つて大成せられたと云ふても、その基礎は馬祖にありと見て良いと思ふ。

かく數へ來れば實に馬祖大師は今日の禪宗の一大恩人であつて、その法孫に屬するもの、一日として忘却すべきにあらずと信じ、こゝに聊か妄言をも其の禪に關する二三を論及し、その功績を讃仰した譯である。（昭一一・一〇・一二稿）